

藤野亀之助論

—三井・トヨタ関係構築史—

木 山 実

はじめに

戦後の日本経済史において、いわゆる六大企業集団の存在感は大きく、またそれらが果たした役割もきわめて大きかったという点に異論はないであろう。六大企業集団は、旧財閥系の三菱・三井・住友の三グループ、また大手都市銀行の第一勧銀・富士銀行・三和銀行を中心とした、銀行系三グループの計六グループから構成されていたが、それら六グループのひとつである三井グループの社長会「二本会」にトヨタ自動車加盟してきたことはよく知られている。

ところで三井グループとトヨタの関係は、一九世紀末にすでに大商社に成長しつつあった三井物産が、当時いまだ東海地方の一発明事業家にすぎなかった豊田佐吉に支援したときにまで遡ることができる。その豊田佐吉が昭和五（一九三〇）年に逝去したのちに刊行された伝記『豊田佐吉伝』に、佐吉の弟佐助が「感謝に堪えぬ人々」と題する文章を寄稿しているが、そこで次のような記述がある。

〔史料一〕

（前略）感謝の意をこめた記録を留めて置きたいと思ふのであります。第一に銘記すべきは故藤野亀之助、故児玉一造両氏の心をこめた外部からの援助です。兄が小巾力織機発明以来藤野氏から賜った御尽力は多大であります。児玉氏は兄が紡績へ進出するに際し熱心なる御助力を下さいました。兄を始め私共一同にとつては、共に忘れ得ない恩人であります。¹⁾

豊田家の者にとつては、藤野亀之助と児玉一造の両名が特に「感謝に堪えぬ人々」であつたとしてゐるのであるが、児玉一造については説明するまでもなく、三井物産棉花部長として活躍した人物で、同社名古屋支店長時代には豊田佐吉との交友も始まり、大正期に棉花部を独立させて東洋棉花を設立し、その実質的な経営者となつたのみならず、一造の実弟利三郎が豊田佐吉長女の娘婿として豊田家に養子入りし、トヨタ自動車の設立時に初代社長に就任したことなどもあつて、この児玉一造の名はよく知られてゐる感があるが、もう一人、名のあがつてゐる藤野亀之助については、児玉ほどに知られてはいないような印象を受ける。

だが三井物産において、豊田との企業間関係構築に最も貢献したのは、児玉一造よりもむしろこの藤野亀之助であつたのであり、児玉はすでに構築された三井物産と豊田の関係をより発展させた人物と解すべきであらう。そのような意義を有する藤野亀之助については、トヨタの経営史研究などにおいてもいくぶん言及されてはきたものの、あくまで発明家豊田佐吉をサポートした副次的存在として語られてきたといつてよいであらう。²⁾

小稿作成の動機は、豊田佐吉の自動織機発明事業や織布・紡績事業を支援しつづけた三井物産の藤野亀之助とは一体いかなる人物であつたのか、という素朴な問題意識にもとづいてゐる。以下では、藤野亀之助に焦点を当て、彼が豊田佐吉ならびに豊田の事業を支援していく過程を追跡しながら、彼の企業者活動をみていくことにしたい。

一、藤野亀之助の出自と三井物産への入社

大正八（一九一九）年刊行の『大日本実業家名鑑』という大部の文献が存在するが、そこには藤野亀之助の断片的な経歴が載っている。彼のキャリアについては、以下のように記されている。

〔史料一〕

【出生】慶応三年四月二十四日を以て埼玉県に生る。多田源七の二男なり。明治十二年前戸主ハマの養子となり十九年家督を相続す。

【学歴】夙に商法講習所に入りて外国語を研修す。

【経歴】学成りて三井物産会社に入り累進して大阪支店長に至る。時に明治三十九年なり。⁽³⁾（後略）

藤野亀之助は慶応三（一八六七）年四月に埼玉県多田源七家で生を受け、明治一二年に藤野家の養子になったというのであるが、これ以後、藤野姓を名乗るようになったものと見られる。右の【学歴】と【経歴】欄を見ると、藤野は一橋大学の前身である商法講習所を卒業してから三井物産に入店したかのような印象を受けるが、事実はそのではないようだ。まず右の引用もとである『大日本実業家名鑑』の学歴欄は、特に大学や専門学校のような高等教育機関を卒業した者については、「帝国大学法科大学を卒業して法学士となる」とか「慶応義塾に学び之を卒業す」などというように、たいていは「卒業」という言葉が使われているにもかかわらず、藤野については「外国語を研修す」という、やや異なった表現が使われている。

また明治一五年頃の三井物産東京本店（あるいは横浜支店の可能性もあるが）の状況に関して、同社社員であった寺島昇という人物が以下のような回顧談を残している。

〔史料二〕



20歳頃の藤野亀之助(右)。左は山本条太郎。

(出所) 『山本条太郎伝記』(山本条太郎翁伝記編纂会、昭和17年) 36ページの写真。

其頃齋藤鐘吉、今の延壽太夫が手本を書いて、それで安田錐蔵、山本、藤野亀之助等が字を習った。少年山本が十六、安田が十五、藤野が十四位だったと思ふ。⁽⁴⁾

ここに出てくる「山本」とは、三井物産での勤務を経て、後に衆議院議員、南満州鉄道(満鉄)総裁になることで知られる山本条太郎のことである。山本条太郎は少年時代に丁稚(小僧)として三井物産に入店したが、のちに清元節の家元延壽太夫となる齋藤鐘吉から、その山本と藤野少年らが字を習っていたというのである。

三井物産は早くから商法講習所をはじめとする高等教育機関卒業生を採用していたが、明治期前半段階では、まだ丁稚(小僧)採用が圧倒的に多かった。⁽⁵⁾ 近世商家の丁稚奉公から手代、番頭へと昇進していくような雇用スタイルにおいては、先輩が後輩の丁稚に「読み書きそろばん」を教えるのが通例であり、右の回顧談でも、多くの丁稚を採用していた明治前半期の三井物産で、先輩が後輩に字を教えるという近世商家で見られたような光景が見られたことが示されている。しかし藤野が商法講習所を卒業してから三井物産に入ったとするならば、そのような教育水準にあった藤野が、先輩から字を習う必要などあったのであろうか。

藤野が商法講習所の卒業生であったのかどうかについては、昭和一一(一九三六)年に刊行された『財界物故

傑物伝」なる文献に、次のような記述がある。

〔史料四〕

彼（丁稚として三井物産で勤務していた藤野―木山注）はかくして、その後益田孝氏の恩顧を蒙り、特別の便宜を以て、商法講習所（東京商科大学の前身）に入り、外国語の研修に寧日がなかった。彼が英語の素地はこの時を以て作られたのである。

要するに藤野は商法講習所を卒業してから三井物産に入ったのではなく、まず三井物産に入店した後、丁稚小僧としての働きぶりが認められ、さらに三井物産社長益田孝の好意で商法講習所に通うことが認められ、英語を勉強したというのである。

ところで三井物産の内部史料として「使用人録」（明治三五年⁶）というものがある。これは、明治三五年当時に在籍した三井物産従業員の入社年月、月給額などを記した人名録であるが、商法講習所、東京商業学校、東京高等商業学校と改称していく現在の「一橋大学の前身校にあたるこれら学校の卒業生のみについては、人名の横に「高・商〇年」という具合に、その卒業年まで記入し、いわゆる一橋系の卒業生であることが識別されている。その人名録に藤野亀之助の名前は確かに載っているものの、「高・商〇年」の記入はないのである。つまり、少なくとも三井物産内部においては、藤野は商法講習所の卒業生として認識されていなかったことは明らかである。

また商法講習所以降の一橋系諸学校卒業生の氏名を列挙する『東京高等商業学校同窓会々員録』（明治四四年⁷）にも藤野の名前はない。このようなことから、藤野は商法講習所の卒業生ではなく、講習所で「研修」した人物であったと考えられる。

詳しい事情はわからないが、藤野は三井物産をいったん退社していたようである。そして三井物産の業務日誌

にあたる「日記」(二〇号)⁽⁸⁾の明治二七年七月一三日の条に次のような記録がある。

〔史料五〕

藤野再勤、藤野亀之助ヨリ当会社へ再勤願書呈出候ニ付、評議ノ上棉花部ニ使用ノ事ニ決シ左ノ辞令相発ス
 当会社ニ雇入手代式等ヲ命ス 藤野亀之助
 自今月俸廿五円ヲ支給ス 手代式等 藤野亀之助
 内地課勤務ヲ命ス 同 同人

藤野は明治二七年七月から再び三井物産に勤務したようであるが、ここでは手代二等での採用であったと記されている。

再入社後の藤野のキャリアは、三井物産の職員録の類で追跡できるので、以下に示しておく。

明治二八年一月調時点…東京勤務手代六等

三〇年二月調時点…上海支店詰、まもなく再び東京勤務となる。

〃 七月調時点…綿花布掛主任

三三年三月調時点…東京本店綿布掛主任

三四年一月調時点…大阪支店綿布掛主任（これ以後、大阪勤務）

手代二等で再入社した藤野が翌年、手代六等になっているのは、それまで手代の上位にあった「番頭」の職階が廃されたことで、番頭にいた者も手代とされたためで、藤野だけが特に降格処分を受けたということではない。

ここで注目したいのは、藤野が短期的とはいえ上海支店に勤務していたということである。藤野と同時期に上海支店に勤務していた人物に、前述の山本条太郎がいる。その山本の伝記にはこの時の上海支店の様子に関する以下のような記述がある。

〔史料六〕

翁（山本条太郎のこと―木山注）が小室三吉氏の下に次席として上海支店に働いたのは、明治二十八年から同三十年十月に亘る。その間の同僚は絶えず出入はあつたが、或期間机を並べて仕事を共にした人には左の諸氏があつた。

藤本悦次郎　井上泰三　安田錐蔵　藤野亀之助　三輪高三郎　石田清直
 江原吉之助　神酒本徳松　津田弘視　大岡破挫魔

この中安田、藤野の両氏は、翁（山本条太郎―木山注）と俱に小僮上りの偉ら者として、錐どん、亀どん、条どんの三どんと並び称された¹⁰……

先にみた明治一五年頃の三井物産内の状況を示した回顧談〔史料三〕にも出てきた山本条太郎、藤野亀之助、安田錐蔵という丁稚小僧あがりの三人が再び上海支店とともに勤務していたことが示されており、藤野のキャリアにおいて山本条太郎が少なからず影響を与えていたことを示唆しているように思われる。山本条太郎はこれ以後も三井物産で上海支店長などもつとめ、中国ビジネスのスペシャリストとして君臨していくことになる。

また藤野が上海支店に勤務したのは、日清戦争後に日本が清国市場で権益を得て、急速に綿製品をはじめとする商品の商権を拡大していこうとしていた時期であることにも注意したい。この後、東京に戻った藤野は、綿製品を扱う綿花布掛、さらに綿布掛の主任に抜擢され、いよいよ豊田佐吉と出会うことになる。

二、豊田佐吉との出会¹¹

豊田佐吉は、藤野亀之助と同じ慶応三（一八六七）年に静岡県でも愛知県に近い敷知郡吉津村に生まれた人物であつた。豊田と藤野の両人が同年生まれであつたということは、兩人に親近感を抱かせるひとつの要因になつ

たものと思われる。

若き日から織機の改良・発明への関心を強くもっていた豊田佐吉は、明治二九（一八九六）年一月頃までには動力織機を完成させていたといわれている。佐吉はこれ以前にすでに、知人の伊藤久八とともに名古屋に進出して糸繰返機などの製造・販売所を設けていたが、その取引先であった愛知県知多郡乙川村おかわの仲買商で出機業も営んでいた石川藤八が、佐吉の動力織機を見て、佐吉と合資で織布会社を起さなうかと提案してきた。それを受け、豊田佐吉が織機六〇台を提供し、石川久八が工場建設の費用を出すことで、明治三一（一八九八）年一月に乙川村に乙川綿布合資会社が設けられ、織布事業が開始された。この乙川綿布で造られた製品は品質が均質で好評を博し、生産も急速に伸びていく。

一方、藤野の勤務していた三井物産であるが、日清戦後の清国での商権拡大などを受け、重要取扱品となりつつあった綿布の担当部署として、明治三一（一八九九）年五月には東京本店営業部内に綿布掛が設けられ、またそれに先だつて明治二九年に設置されていた名古屋出張所を、三二年三月には支店に昇格させ、名古屋地区での取引を活発化させようとしていた。三井物産がまさにこのような状況にあったとき、明治三二年夏に、その物産名古屋支店が遭遇したのが、豊田佐吉発明による動力織機で織られた乙川綿布の綿布であった。三井物産では、乙川綿布製品が持つ従来の綿布にない品質の均質性に注目したのであった。

乙川綿布製品に注目した三井物産では、綿布掛の藤野亀之助と名古屋支店員に乙川綿布工場を訪問させ、彼らは豊田式織機の性能を知るにいたった。当時の動力織機の価格は輸入品としてのドイツ・ハートマン社製が八七二円、フランス・ジュードリツヒ社製が三八九円であり、日本製は津田式が一〇〇円、それに対して豊田式は九三円(12)で、しかも品質も良かった。藤野は三井物産の事実上トップにいた益田孝専務理事と上田安三郎理事の指示を受け、ただちに物産名古屋支店長の寺島昇、三井銀行名古屋支店長の矢田績を同道し、名古屋にいた豊田佐吉

を訪問した。⁽¹³⁾ここに三井財閥の物産・銀行と豊田佐吉が初めて相まみえたことになるが、これが東海地方の発明家にすぎなかった豊田が全国区で雄飛していく契機になったといつてよいであろう。これを機に豊田と藤野は懇意になり、豊田が上京して物産東京本店の藤野を訪ねた際には、藤野は喜んで本店内部を案内したとい⁽¹⁴⁾う。

その後、三井物産の側では同年秋に織機工業のエンジニア高辻奈良造に依頼して豊田式織機の性能や品質を鑑定させたが、高辻は豊田式織機を高く評価した。これを受け、三井物産では豊田佐吉の発明に対し積極的な支援を決定し、豊田式織機を三井物産で一手販売する計画を立てた。豊田はこの時の支援打診を受け入れ、同年（明治三二年）一月に資本金三万円、三井物産全額出資の井桁商会が名古屋に設立された。豊田佐吉はここで技師長となって発明事業に専念し、井桁商会で製作された織機は三井物産が5%の手数料を受け取って一手販売するものとされた。そして三井物産からは社員の松本常磐と服部種次郎がいったん物産を退社して井桁商会に役員として派遣されることになった。

明治三二年夏に三井物産側で乙川綿布製の綿布に着目するや、同年一月の井桁商会設立まで、実に短時間のうちにものごとが進められたことが察知されよう。豊田は三井物産との関係構築を端緒に、三井物産首脳の益田孝、上田安三郎はもちろん、三井物産の取引先であった名古屋のメーカーとして当時大きな存在感のあった日本車輛とも関係を築き、さらに大隈重信といった中央政界の大物も豊田を訪問するなど、ネットワークを一挙に拡大させていった。いわば“物産効果”とでも呼ぶべきものの特典を、豊田は存分に享受したといつてよいであろう。

だが三井物産の支援で設けられた井桁商会は、当初は好調で業績も良好であったが、それは長続きせず、豊田佐吉はわずか一年数ヶ月のうちに井桁商会を辞任した。豊田佐吉と三井物産から派遣された役員二名との間で、

経営方針上の対立があったといわれており、豊田退社後、井桁商会は資本金を一万円に減資し、事業目的を豊田式織機の製造販売から、当時考案された織機を広く扱うことに変更されたという。

ところで井桁商会設立の少し前になるが、明治三二年六月に、三井物産での輸出綿布取り扱いの中心部署（首脳）は、東京本店から日本の綿工業の中心地ともいべき大阪の支店に移され、藤野亀之助も大阪に転勤となっている。藤野は大阪から、井桁商会を辞任した後の名古屋の豊田を支えていくことになる。ちなみに豊田と出会った頃の藤野の月給額は、明治三二年二月調べの人名録から八〇円程度であったと推測されるが、明治三五年には、それが一五〇円となっていて、⁽¹⁶⁾ 非常な増額ぶりであったことが予想される。当時の物価は、東京での米の小売価格が一〇キログラム換算でだいたい一円一三銭から一円二八銭程度、明治三三年の東京の小学校教員の初任給（月額）が一〇円から一三円⁽¹⁷⁾ というような時代であるから、大商社に勤める藤野の給料はかなり高額であったといつてよいであろう。

三、大阪財界での藤野亀之助

豊田佐吉が井桁商会を辞任した後も、三井物産では豊田の鉄製織機、自動杼替装置の開発・発明事業に注目し、陰に陽に彼を支えつづけた。明治三八（一九〇五）年には、資本金二〇万円で豊田式鉄製自動織機の製造と織布事業を目的とする名古屋織布株式会社が設けられた。この会社の設立については、実質的に出資は三井物産が負担した。会社の仮事務所は三井物産名古屋支店内に置かれ、役員には大阪の財界人も名を連ねており、大阪支店長に昇進していた藤野亀之助が、大阪で活発に豊田式織機を宣伝していた様子⁽¹⁸⁾ が予想される。

三井物産では、日露戦後の権益拡大を受け、明治三九（一九〇六）年二月に大阪紡、三重紡、岡山紡、天満紡、金巾織に働きかけて日本綿布輸出組合を結成させていた。三井物産はこの組合から手数料なしで「満州」（中

〔国東北部〕への綿製品輸出を請け負うことにした。⁽¹⁹⁾ また同年三月には朝鮮市場向けの綿布輸出について、大阪紡、三重紡、金巾織の三社が三栄綿布組合を結成し、この組合が三井物産大阪支店に朝鮮向けの一手販売を委託して輸出を行うこととなった。⁽²⁰⁾ これら両組合の設立には、大阪支店長で棉花部長も兼ねていた藤野亀之助が尽力したものと予想される。藤野は同年四月には大阪紡の山辺丈夫、鐘紡の武藤山治ら大阪、さらに中京の紡績会社幹部たちを引き連れ、「満州」を視察・調査し、日本から「満州」への綿布輸出拡大の可能性を探っている。⁽²¹⁾

大阪財界における三井物産大阪支店長の地位は相当に高く、藤野の前任者福井菊三郎の場合と同様に、大阪支店長に昇進した藤野も明治四〇（一九〇七）年に大阪商業会議所の顧問に当選し、四五（一九一二）年以降は同所でも一〇名しかいない特別議員——大阪高商校長、大阪高工校長、住友家総理事、藤田組理事、大阪市長など錚々たる面々が就任していた——に名を連ねている。藤野は前述の「満州」視察以外にも中国視察に出向いており、帰国後、現地商工業を視察した成果を、談話会と称して大阪商業会議所内で講演することもあった。⁽²³⁾

豊田との関係では、織機の製造販売を目的として、さらに明治四〇（一九〇七）年に豊田式織機株式会社が設けられた（以前に設けられていた井桁商会、名古屋織布も、ともに存続されている）。豊田式織機株式会社は資本金一〇〇万円と設定され、当時としてはかなりの大企業であった。創立総会は同年二月に藤野のいた三井物産大阪支店で執り行われた。社長には大阪合同紡の谷口房蔵が就任し、豊田佐吉は常務取締役兼技師長となっている。主要株主としては三井物産社長三井八郎次郎と豊田佐吉がそれぞれ一〇〇〇株ともっとも多く、三井物産の関係者では藤野（五〇〇株）はもちろん、飯田義一（五〇〇株）、益田太郎（五〇〇株）、岡野悌二（二〇〇株）なども出資した。藤野や飯田、岡野らによる出資の資金源が三井物産から出されたものか、彼ら自身の資産から拠出されたのかは不明である。他には中京財界の指導者的存在であった奥田正香（三三〇株）や神野金之助（五〇〇株）らが出資し、大阪財界からも山辺丈夫、谷口房蔵、三井物産出身で北浜銀行社長の岩下清周、摂津製油

の志方勢七、日本綿花の田中市太郎（山辺以下全員五〇〇株）など、三井物産幹部、大阪、名古屋の著名財界人が株主に名を連ねており、棉花部長として紡績業界との関係を深めた藤野の尽力ぶりがかげえるところである。だが周知のように、豊田佐吉は以前の井桁商会辞任劇と同様、この会社も追われてしまう。明治四三（一九一〇）年四月、役員会で豊田の解任が決定されたのである。解任の直接の原因は開業後三年にわたる業績不振ということであつたが、実際は豊田の發明優先主義への批判、豊田と他の役員の間不和であつたといわれ、以前の井桁商会における豊田の辞任劇と同様の問題が発生していたということになるであらう。⁽²⁴⁾

藤野は、このような解任という憂き目にあつた豊田佐吉との関係を切ることはなかつた。失意のなかにあつた豊田は同年五月に欧米視察の旅に出るが、まず最初に訪問したアメリカではまず西海岸シアトルに上陸し、東部に向かった。東部では三井物産ニューヨーク支店員が待ちかまえ、アメリカでの工場視察なども手配して懇切丁寧⁽²⁵⁾に豊田に対応した。この時、ニューヨーク支店長瀬古孝之助に渡米中の豊田の世話を依頼しておいたのは大阪支店長の藤野であつた。⁽²⁵⁾

四、藤野亀之助の三井物産退社

豊田佐吉は明治四四（一九一一）年一月に欧米視察の旅から帰国した後、織機の發明事業を継続しつつ、独立自営の織布工場の経営を企画し、豊田自動織布工場という名の工場を同年中に建て、翌大正元（一九一一）年秋には操業を開始している。一方、三井物産の藤野は豊田を追放した豊田式織機株式会社に関与しつづけ、同社と解任後の豊田との契約関係や豊田への特許支払いの見直し・更改などに尽力した。豊田は豊田自動織布工場の操業開始後まもなくして紡績業の兼営をも企画するが、藤野は三井物産を通じ、その資金を供給したのであつた。⁽²⁶⁾

大正三（一九一四）年に第一次世界大戦が勃発すると、戦場とならなかつた日本にはその後にか好況の波

が押し寄せ、大戦景気を謳歌することになるが、綿製品と織機の市場も急拡大し、豊田佐吉本人ならびに豊田を支えつつけた三井物産、および藤野亀之助もようやくやくにして報われることになる。まさにその頃のことと推測されるが、豊田佐吉を囲む宴席が催された次のような光景からは、豊田と藤野の友情が相当に深いものであったことが察知されよう。少々長いが引用しておきたい。

〔史料七〕涙の感謝会

晩年、翁（豊田佐吉―木山注）は東京築地の瓢屋で、成功感謝会なるものを開いた。……中略……

この会には三井物産の大御所益田孝氏や団琢磨氏をはじめ、多数の名士が列席した。席定つてから、性来寡黙な翁に変わつて、親友の藤野亀之助氏が徐に起つて挨拶を述べた

「諸君、今夕は我国発明界の巨人豊田佐吉君が今日まで辿り来つた過去をふりかへられまして、ぜひとも親しく膝をつき合せて感謝しなければ相済みぬといふので、催された次第でございます。つきましては御多用にも拘りませず、かく多数おはこびを願ひまして主催者としてこの上の光栄はございません。豊田君に代りまして厚く御礼申し上げます。

豊田君は御承知の如く遠州の片田舎に生れ幼にして発明に志し織機の発明に入りてよりは実に浮沈多き生活が続け或時は親子夫婦相擁して泣きくづれた事もありました」

と、ここまで述べて来ると、傍らにゐた翁は感極つたのであらう、人に隠れるやうにして泣いてゐた。そして藤野氏もまた涙ぐむで挨拶が続けられないのであつた。²⁷⁾ ……

ところで、第一次大戦勃発の直前、大正三年二月に三井物産棉花部長は藤野から児玉一造に交替している。²⁸⁾そして藤野は同年九月には大阪支店長の職も後任の武村貞一郎に譲り、囑託となつて三井物産を退社・独立したようである。²⁹⁾このときの藤野退社の事情は明らかではないが、藤野が「四国事業視察に当り一鉢山の有望なるより垂

延措く能はず、独立経営せんとの願望を抱き……同社（三井物産―木山注）を辞し、愛媛県太平鉾山等の鉾山主となつたとする史料がある。⁽³⁰⁾ 事業投資欲旺盛な藤野は、三井物産大阪支店長という地位に飽きたらず独立したというのであるが、『財界物故傑物伝』（昭和一年刊）は紡績、鉾山などに投資した藤野が、それらの投資を適中させて利益をあげ、資産額二〇〇万円と称せられたと記している。そしてこの資産を保全する目的で藤野合資会社が設けられたといふ。⁽³¹⁾

先に〔史料二〕でも見た『大日本実業家名鑑』（大正八年刊）では、藤野が取締役や監査役に就いていた企業を以下のように列挙している。

小田原紡織株式会社、大阪電気軌道株式会社、堺セルロイド株式会社、王子製紙株式会社、
（以上、取締役）

実 山 木

電気化学工業株式会社、菊井紡織株式会社、大連土地株式会社、豊田式織機株式会社、湯浅電池製造株式会
社（以上、監査役）⁽³²⁾

豊田式織機はもちろん、堺セルロイドや王子製紙、湯浅電池なども三井と密接な関係を有していた企業であり、藤野が三井物産退社後もそのような企業の取締役・監査役に就きつづけることができたのかはやや疑問の残るところではある。

また豊田との関係でも、豊田佐吉が明治末年から操業していた豊田紡織工場を大正七（一九一八）年一月に資本金五〇〇万円の豊田紡織株式会社に改組した際、表1のように、藤野は豊田佐吉に次ぐ第二位の大株主として名を連ねている。豊田佐吉に次ぐ藤野の出資分二万九四〇〇株というのは払込金額で八五万円余にもほるもので、豊田家の人々による出資と比べても、きわめて多額な出資である。由井常彦氏はこの時の藤野の出資について、「藤野個人のこうした多額の出資は現実には考えがたいところであり、長い間三井物産から豊田紡織の資金

表1 創立時豊田紡織株式会社
創立時の主要株主

株主名	持株
豊田佐吉	48,000
藤野亀之助	29,400
豊田利三郎	10,000
児玉米子	9,000
豊田喜一郎	500
児玉一造	500
豊田平吉	300
豊田愛子	300
豊田伊吉	200
豊田佐助	200
豊田洋子	200
児玉桂三	200
豊田ゑい	100
豊田なを	100
豊田すが	100
園田忠雄	100
園田武彦	100
藤野つゆ	100
鈴木正吉	100
鈴木こう	100
鈴木栄蔵	100
鈴木ろく	100
鈴木金蔵	100
園田操子	50
園田京子	50
計 25名	1,000,000株

(出所) 由井常彦「三井物産と豊田佐吉
および豊田式織機の研究(下)」
『三井文庫論叢』第36号、平成14
年) 173ページ。

助成を主張し、豊田紡織の設立時に融資を実現していたことからみて、藤野の名義による三井物産からの間接的な出資の可能性は、否定できないように思われる。⁽³³⁾と述べられている。

筆者は由井常彦氏によるこのような記述を肯定したり否定する史料を持ち合わせていないが、先述のとおり、藤野の資産額が二〇〇万円に達していたという記述が事実ならば、この豊田紡織への藤野による八五万円余の出資は、藤野個人の出資として不可能な額ではないことになる。ちなみに豊田佐吉も藤野もともに逝去した後のことになるが、昭和一三(一九三八)年におけるトヨタ自動車工業創立時の株主は表2のとおりであって、藤野家の資産保全会社である藤野合資が六〇〇〇株、また藤野家の勝太郎、平次郎、和三郎の分も合わせると合計八〇〇〇株分を藤野家から出資し、藤野亀之助の名義の豊田への出資分の出元が三井物産ならば、その出資分は藤野の死後、当然何ら仮りに大正期の藤野亀之助名義の豊田への出資分の出元が三井物産ならば、その出資分は藤野の死後、当然何ら

表2 トヨタ自動車工業創立時の株主
(昭和13年3月末日現在)

株 主	持 株 数
豊田自動車織機製作所	180,400株
豊 田 紡 織	10,000
豊 田 利 三 郎 (社長)	10,000
豊 田 喜 一 郎 (副社長)	10,000
藤 野 合 資	6,000
庄内川レーヨン	5,000
寺 田 甚 吉 (取)	5,000
児 玉 桂 三	5,000
豊 田 佐 助	1,000
藤 野 勝 太 郎 (取)	1,000
豊 田 平 吉 (監)	500
岡 部 岩 太 郎 (監)	500
大 島 理 三 郎 (常取)	500
竹 内 賢 吉 (常取)	500
西 川 秋 次 (監)	500
藤 野 平 次 郎	500
藤 野 和 三 郎	500
中 村 米 治 郎	500
森 治 郎	500
鈴 木 利 蔵	300
岡 本 藤 次 郎 (監)	300
菅 隆 俊 (取)	300
岡 崎 栄 一 (監)	300
池 永 罷 (取)	300
伊 藤 省 吾 (取)	300
神 谷 正 太 郎 (取)	300
合 計	240,000

(出所) 森川英正『地方財閥』(日本経済新聞社、昭和60年) 268ページ。

かのかたちで回収されたと思われるが、昭和初期のトヨタ自工創立時に藤野家から少なからざる金額が出資されている事実をみると、大正期の大戦景気のなかで利益をあげた藤野亀之助の資産が二〇〇万円にもおよんだとの記述も事実であったように思えてくる。

三井物産退社後の藤野の活動としては、大正四(一九一五)年に大阪株式取引所の理事長に就いていることが注目される³⁴⁾。この大阪株式取引所での活動を通じ、藤野は株式仲買人出身で株式の「買占屋」、会社の「乗取屋」と称された島徳蔵³⁵⁾との関係が深まったようである。島徳蔵は藤野の後任として大正五年に大阪株式取引所理事長

となっているが、大正七年に中国・上海に綿糸や有価証券取引のための上海取引所を設け、その社長に就任している。この上海取引所の重役陣は以下の通りであって、藤野も取締役として名を連ねた。

社長・島徳蔵

常務取締役・呉大五郎、江原吉之助

取締役・奥繁三郎、志方勢七、藤野亀之助、宮崎敬介、王一亭

監査役・藤山雷太、山本条太郎、朱葆⁽³⁶⁾

興味深いのは、先に〔史料六〕でみた藤野亀之助が三井物産上海支店在勤時に、ともに机を並べたという江原吉之助、山本条太郎も、ここに名を連ねていることである。青年期の交わりが、この時まで続いていたことを示唆している。三井系では他に三井物産出身の呉大五郎、三井銀行出身の藤山雷太も加わっており、また藤野の尽力で明治四〇（一九〇七）年に豊田式織機株式会社が設けられた際の出資者であった志方勢七も藤野と同じく取締役に加わっている。

三井物産を退社して独立し、大戦景気のなか旺盛な事業欲で躍動していたように見える藤野亀之助であったが、不幸にも大正九（一九二〇）年一月七日、流行性感冒——当時流行した「スペイン風邪」であろうか——で死亡してしまう。⁽³⁷⁾享年五二であった。

むすび

三井物産は明治九（一八七六）年の創業以降、政府米輸出や官営事業の三池炭輸出など政府関係の業務（御用商売）が多くを占めていたが、明治二〇年代には、御用商売の比率が低下し、逆に民間との取引を増やしていく必要に迫られていた。そのさなか、豊田佐吉発明の自動織機に出会った三井物産は、本稿でみたように豊田を支

援しつづけた。その三井物産において、井桁商会や豊田式織機株式会社で他の役員たちとの不和を繰り返し、ややもすれば変わり者扱いされていた豊田佐吉を見限ることなく、実に辛抱強く支えつづけた藤野亀之助の活動の意義はきわめて大きい。藤野は三井物産において投融資を通じて新たな商権を形成するという新たなビジネスモデルを推進した象徴的な人物であったといってもいいように思われる。藤野の豊田佐吉への支援活動を裏打ちしたのは、企業間関係を越えた友情というか、人間的なきずなであった。

このような藤野亀之助の企業者活動は、日本の綿工業の中心地であった大阪財界と豊田の拠点であった中京の財界を結びつけた点でも意義深いものがあつた。藤野は三井物産大阪支店長として、日本の綿製品の主要な市場となつていく中国市場を常に見据えていたことも特徴であつたといつてよいであろう。それは少年期にともに丁稚小僧として三井物産に奉公に始まり、また短期間ながら上海支店でもともに勤務し、その後、三井物産上海支店長に昇進する山本条太郎の影響が予想されるのであるが、この点を明らかにするのは今後の課題とせざるをえない。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

注

- (1) 田中忠治編『豊田佐吉伝』(豊田佐吉翁正伝編纂所、昭和八年)三五七頁。
 (2) 例えば森川英正『地方財閥』(日本経済新聞社、昭和六〇年)二二六九頁、和田一夫・由井常彦『豊田喜一郎伝』(名古屋大学出版会、平成一四年)第一章、武田晴人『世紀転換期の起業家たち』(講談社、平成一六年)第一章、などを参照。

- (3) 『大日本実業家名鑑』下巻(実業之世界社、大正八年)「藤野亀之助」。『財界物故傑物伝』下巻(実業之世界社、昭和一一年)三四三頁では、藤野は「多田原七の長男として」生まれたと記されている。

- (4) 原安三郎編『山本条太郎翁追憶録』(三秀社、昭和十一年) 七一四頁。
- (5) 若林幸男『三井物産人事政策史一八七六―一九三一年』(ミネルヴァ書房、平成一九年) 一七頁。
- (6) 三井文庫所蔵史料「使用人録」(物産五二一一)。
- (7) 国会図書館・近代デジタルライブラリーで閲覧可能。
- (8) 三井文庫所蔵史料「日記」二〇号(物産二〇)に藤野再勤の記録があることは三井文庫の樋口知子氏からご教示を受けた。記して感謝したい。
- (9) 三井文庫所蔵史料(物産五〇)。ちなみに三井物産の「人名録」「職員録」の類に藤野亀之助の名が初めて登場するのは、『三越店員・物産会社員・東京相統講員人名控』(三井物産所蔵史料、別六九)であろう。この史料は明治一六年一〇月の三井物産人員のうち手代以上の者の名を記した名簿を明治二〇年一月に更正し、それをさらに翌二一年に改訂したものである。藤野は明治二二年に増員された一四名のうちの一名と見られる。藤野の名が明治二一年に初めて記載されたのは、それまで彼がまだ手代にまで昇進していなかったためか、あるいは本文中で述べたように商法講習所(明治一七年以後、東京商業学校と改称)で勉強していたなどの理由が考えられるが、詳しいことは分からない。
- (10) 山本条太郎翁伝記編纂会編『山本条太郎伝記』(三秀社、昭和一七年) 一一二頁。
- (11) 本節の記述は断りのない限り、原則として由井常彦『三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(上)』(『三井文庫論叢』第三四号、平成二二年)に拠る。本稿は由井常彦氏の一連の研究に触発されるところが大きい。
- (12) 楫西光速『豊田佐吉』新装版(吉川弘文館、昭和六二年) 四八頁。
- (13) 前掲、田中編『豊田佐吉伝』 九八頁。
- (14) 同右、一〇〇―一〇一頁。
- (15) 前掲、三井文庫所蔵史料(物産五〇)に綴じられた「明治三十一年二月一日現在」の部分参照。手書きで月給額と推測される記入がある。

- (16) 前掲、三井文庫所蔵史料「使用人録」(物産五二一一)。
- (17) 甲賀忠一ほか編『物価の文化史辞典』(展望社、平成二〇年)二九頁、三九八頁。
- (18) 由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(中)」(『三井文庫論叢』第三五号、平成一三年)一〇三頁。
- (19) 『稿本三井物産株式会社一〇〇年史』上(日本経営史研究所、昭和五三年)二八二頁。
- (20) 同右、二四六頁。
- (21) 『三井事業史』本篇第三卷上(三井文庫、昭和五五年)五一頁。前掲、由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(中)」一一五頁。
- (22) 『大阪商工会議所史』(大阪商工会議所、昭和一六年)七一七頁。
- (23) 『明治四五年大正元年大阪商業會議所年報』(大阪商業會議所、大正二年)三八頁および巻末の附録参照。
- (24) 前掲、由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(中)」一三三頁。
- (25) 前掲、田中編『豊田佐吉伝』二八一頁(瀬古孝之助の追憶録)。
- (26) 由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(下)」(『三井文庫論叢』第三六号、平成一四年)一五三頁以下参照。
- (27) 前掲、田中編『豊田佐吉伝』二二四―二二五頁。
- (28) 前掲『稿本三井物産株式会社一〇〇年史』上、三五八頁。
- (29) 前掲『財界物故傑物伝』下巻、三四四頁。
- (30) 小川功「鉱業投資とリスク管理(序)」(『彦根論叢』三五五号、平成一七年)三頁。本文中「」内の原史料は、漆正二郎『大阪財界一百人』(株式研究会、大正六年)二四三頁とのことである。
- (31) 前掲『財界物故傑物伝』下巻、三四四頁。
- (32) 前掲、『大日本実業家名鑑』下巻、八三頁。
- (33) 前掲、由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(下)」一七二頁。

実

山

木

- (34) 前掲『財界物故傑物伝』下巻、三四四頁。
- (35) 島徳蔵については、山田充郎「取引所理事長と『乗取屋』——島徳蔵の二つの顔——」〔『企業家研究』第四号、平成一九年〕参照。
- (36) 「新たに開設されたる株式会社上海取引所」〔『時事新報』大正八年一月二七日〕神戸大学附属図書館デジタルアーカイブで閲覧可能。
- (37) 稲村徹元ほか編『大正過去帳』（東京美術、昭和四八年）一九六頁。